

生と死を考える試み — 保育者養成において —

尾 上 明 子
中 根 淳 子

I 緒 言

「お母さんに一緒にお風呂に入ったり、抱っこしたりしてほしい」そう園長に訴えたある4歳の保育園児は、その後虐待によってかけがえのない命を終えてしまった。保育所はその歴史の中で保育に欠ける子どもを預かる場所であり、「病気」や「死」とは無関係のエネルギーに満ちた子どものための場所というイメージがあった。しかし、最近卒業生や実習生が、肉親による虐待を受けている疑いのある保育園児を目にしたショックを研究室で訴えることが多くなったことはどの教員も実感していることであろう。保育所が子どもの生活する場所である以上、実はそこには「生」の連続として「死」も存在する。しかし、保育士養成課程において、「生」「死」を冠した教科はなく、さまざまな教科の中に分散され評価まで至っていないのが現状である。

ところが、最近の小中学校で多発する殺傷事件を受けて、「命の教育」を授業の中に組み入れる小中学校が増えてきた。その一例として生きるちから VIVACE (特定非営利活動法人) 理事長の甲斐は1997年から「いのちについて考える授業」を行ってきた¹⁾。1997年というすでにこのような試みが一般化している時期のように思われるが、実は教育現場では「死なんて縁起が悪い」と受け入れられず、2003年現在は年間100件以上の受講申し込みがあるものの、当初はわずか2校だったという。また、岡崎市立矢作中学の天野幸輔教諭は、中学生に対する死の教育としてペットの死に関する体験談の分かち合いから導入してディベートや講演を取り入れたプログラムを実践し、生徒は自分の命、人の命の大切さに気づくなど成果を上げている²⁾。一方、さらに死のタブー化が強かった1986年に、アルフォンス・デーケンはそのまでの試みを「〈叢書〉死への準備教育 (デス・エ

デュケーション)」としてまとめ、出版した。現在、上智大学でデーケンが行っている「死の哲学」の年間カリキュラムは、哲学的に見た死の意義—「死への準備教育」の必要性、死へのプロセスの六段階とその理解、悲嘆教育などから始まり、ホスピス運動や臓器移植の問題まで踏み込んだ全25回からなり、講義だけでなくグループディスカッションやブックレポートなどの方法を用いた充実したカリキュラムとなっている³⁾。

しかし、先に述べたように、保育者を養成する学校におけるこれらの取り組みに関する報告は少ない。これら養成校に在学する学生の多くは adolescence (思春期) に属している^{註1)}。この世代の子どもたちは、交差する世代のすべての死と出会うことのある最初の発達グループでもあり、保育所での「生」「死」に関する体験だけではなく、両親の死や、祖父母の死、あるいは子どもの死や他の人々の死を体験する可能性を持つ⁴⁾。Adolescence の子どもたちは抽象的、概念的、科学的に死を考えることができる年代と言われてはいるものの、必ずしも直面する死に上手に対処できるわけではない。また、Goertzen は「生」と「死」の体験を共有することは内省と成長の機会であると主張している⁵⁾。上記のことから、子どもの尊い命を預かる保育士になるものとして、また、年齢的な特徴から「生」と「死」について考える動機付けをする必要性を感じた。そのため後述するいくつかの取り組みを行い、考えさせられる結果が得られたので報告する。

II 研究方法

(1) 対象

保育者を目指す本学2年生、26名(全員女子、筆者らの担当学生)。2年生を選んだのは翌年に専門職としての資格を持ち就職、あるいは進学す

る時期であることから、これらの試みへの意欲が高いのではないかと思われたためである。

(2) 方法

表1のように、講演を含んだ命について考えるプログラムを設定し、その経過において書いてもらった学生の記述をもとに、「生」や「死」に関する最初の考え方から何らかの変化があったかを中心に考察した。今回は筆者らの初めての試みであったため、分析は高度に客観的な手段ではなく、学生の記述内容が変化した点や深まったと思われる点について先人の文献とともに著者らの感想も多く含めて分析した。

プログラムは一部、総合演習の時間を用いたが3回は授業の空き時間を利用した。場所は教室での講演以外は静かで集中しやすいマタイ教会ホールを借用した。絵本の展示は歴史資料室に隣接する教室で行った絵本展（主要テーマは別）のコー

ナーに展示した。

第2回のグループワーク、および第3回、第4回の講演は学生および演者の了解を得て録音した。

なお、さまざまなバックグラウンドを持つ学生がいるため、テーマが学生の精神面に与える影響を考慮し、第1回のアンケートの記述を読んだ上で、自殺願望の強いものなどいないと判断し、強制しない形で継続した。日常の学校での接触の際も精神面の大きな変動の有無を観察した。また、第1回、第5回の記述も記述量の指定は行わなかった。

Ⅲ 結果

1. 第1回（質問項目表2）

(1) 質問1

幼少期をふり返ってのことであるため、記憶があいまいな部分があることが推測されるが、考えていなかったという内容の記述が3分の1近くあ

表1 生と死を考えるプログラム

	内 容	ね ら い
第1回 6月7日 50分	質問に記述式で自由に答える。 *レポート用紙はあらかじめ製作し、枚数の制限は設けなかった。質問内容表2参照	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児期のころの「死」についての概念を知る。 ・小動物や、ペットの「死」など答えやすい質問に答えることによって、これから受ける一連の授業や、テーマへの学生の興味を引き出す。 ・身近な人の死の体験の有無を記述することにより研究者の対象者への理解を図る。 ・また、身近な人の死が学生の「死」の概念形成に影響しているかどうかを知る。 ・現在「死」についてどのように考えているかあらためて記述することによって、「考えていない」という態度も含め、学生自身が「死」にどのように向かい合っているか認識する。
第2回 6月28日 50分	グループワーク	<ul style="list-style-type: none"> ・「生」や「死」について自分以外の学生がどのような考えを持っているのかを知る。*一部、看護に携わっていた筆者の経験も話した。 ・「死」への不安や、身近な人の「死」の体験を共有する。
第3回 7月8日 90分	畑野寿子さん講演 (講演要旨後述)	教会の胎児教室で、命の大切さを長年教えてきた講師の話を通して、命の重みを知る。
第4回 7月15日 90分	鈴木中人さん講演 (講演要旨後述)	娘を小児がんで失った父親の話聞くことにより、生きることの意味、「死」とは、また、「死」を通して「生」を考えるきっかけとする。
第5回 7月22日 60分	講演と授業全体への感想記述	<ul style="list-style-type: none"> ・命について考えたことを文章表現させ、4回の取り組みを通して、学生自身の中に何らかの変化が起きたかどうかを記述させる。 ・記述することによって、さらに自分の考えを整理し深めていく。
その他 7月12日～ 8月6日	絵本展における「生」と「死」に関する絵本の展示	「どこにいるのおじいちゃん」「『さよなら』っていわせて」「葉っぱのフレディーのちの旅ー」など全30冊を展示し、絵本になじんでいる学生に「生」「死」を考えるきっかけを与える。

表 2 第 1 回 質問項目

*「死」に関するあなたの考えを自由に書いてください

1. あなたは、子どもの頃、「死」についてどのように思っていましたか？
2. あなたは、死と同じような、あるいはそれに近いような苦しみ・悲しみを経験したことがありますか？
3. あなたは、身近な人（親族や友人、知人）の死を経験したことがありますか？ また、そのときどのように感じましたか？
4. あなたは、小動物・生物の死を経験したことがありますか？ また、そのときどのように感じましたか？
5. あなたは、ペットの死を経験したことがありますか？ そのときどのように感じましたか？
6. あなたは、現在「死」について、どのように感じて（考えて）いますか？

た。また、死後観では星になる、天国・地獄へ行く、空で見守る、生まれ変わるなどがあつた。また、死に対する感情的な反応としては不安や怖感が強かった者が多かった。また、「地獄」に対する恐怖を記述した者もいた。そのほか、悲しみ、嫌悪感などがあつた。

(2) 質問 2

死に近いような苦しみとして人間関係における苦痛をあげた者が 10 名で、肉体的な苦痛をあげた者より多かった。その内容としてははじめ、友人関係における苦痛や失恋などであつた。その他、身近な人との死別、将来への不安などがあつた。ないと答えた者も 8 名と比較的多かつた。

(3) 質問 3

両親のうちのどちらかなどごく近い肉親を亡くした者が 2 名、曾祖父母、祖父母の死を経験した者が 15 名、おばや、いとこなど親戚の死を経験した者が 8 名、知人や小学校の同級生がなくなった者が 2 名だつた。ごく近い肉親を亡くした 2 名の学生は、初め何がなんだかわからなかつたと突然の死を理解できなかつたことを記述している。中学で肉親を失った学生は時が経つにつれ、天国で見ていてくれる、家族を助けて生きていきたいなどと記述しているが、家族の死からまだ数年を経ている学生は悲しさやつらさを実感し、穴が開いたように物足りなく寂しいと述べている。曾祖父母、祖父母、親族でも、生前、身近な存在であつた場合は、強い悲しみ、ショック、後悔などを記述しているが、同居していない場合や、死に立ち合わなかつた場合、葬儀に出席しなかつた場合などは実感がわかないこともある。しかし、生前あまり交流がなかつた祖母が自分たちの写真をくたびれるまで見ていたことを知り、亡くなつた

祖母の思いがけなく深い感情を目の当たりにして愕然とした学生もいた。そのほか、自分の親が悲しんでいるのを見て悲しくなつたり、祖父母などが亡くなってしばらく立つと、匂いが消えていく感じや部屋の広さなどから死を実感したと述べた学生もいる。また、どこかで会える気がする、見守られている、法事により「心の中で話をする」ことがわかつたと記述した者もいた。

(4) 質問 4

小動物の死の体験の機会でも多いのは、捕まえた小動物の死で、あまり何の感慨もなかつたものから嫌悪感、罪悪感を感じたという記述や動物の幸せも考えて行動すべきという記述もあつた。次に多いのは車にはねられたネコなどの目撃である。悲しみ、恐怖、人間のせいだと思う罪悪感、無力感など様々な感情を体験しているが、中にはその体験から小動物にも注意して運転しようとする学生もいた。巣から落ちたり迷い込んだりした鳥の死の体験も多かつたが、何も感じなかつたものから、哀れみ、悲しみを感じて埋葬したものもいた。その他、動いている魚を自分が食べたことにより、人間は生き物の死によって支えられていると実感し感謝しなければと思ったという記述があつた。

(5) 質問 5

かわいがつていた犬、猫、ハムスターやモルモット、小鳥などの死の体験者は 22 例（重複している者あり）にも上り、辛さや悲しみの表現が多い。しかし、悲しみだけではなく、家の中で自由に生きていたペットを幸せだつたかもしれないと感じたり、楽しい思い出をいっぱい作つてくれたと感謝したり、ここまでよく頑張つたと長生きしたペットの死を受け入れるような表現もある。また、こ

の作業の中で、愛犬も年老いてきたのでかわいがってあげたい、という記述もあった。

(6) 質問 6

身近な人の死を体験していない学生は、「死」への恐怖、特に自分自身の「死」よりも身近な人

の死を想像して恐怖を覚えている例があり「死は考えられない、誰も死んじゃだめ(表3-1,6)」と記述する一方、肉親の死を体験しているある学生は死を「現実起こる」もの、「心において」おく必要性があると述べている(表3-5)。しか

表3 第1回質問6の結果

1. 感情的な反応	<ul style="list-style-type: none"> ・目に見えない恐怖 ・怖い(5) ・つらい ・とても悲しいもの ・暗いイメージ ・後悔やつらさにつながる ・心の中で生きているなどと思うのは無理 ・死と同等の経験したくない ・怖がることはないとはわかっているが怖い(2) ・身近な人の死は寂しく悲しい ・人からいろいろ言われてもすべて否定したくなる ・今起こるかもしれないものという思いが強い ・身近に感じるがいい意味に取れない ・身近な人の死を想像するだけで自分も生きていけない ・周りの人が死んだらその後どうやって生きていったらよいか不安で悲しい
2. 死の概念 意味づけ	<ul style="list-style-type: none"> ・肉体の死 ・死後も周囲の人に影響を与えるので完全にこの世から消えることは無い ・人々の記憶から消えたときその人の存在が無くなる ・人や物、生物との関係が完全になくなったときが死 ・死ぬなら生きていることに何の意味があるのか ・死は別れ・周りの人がつらい思いをするもの ・自分とは関係ないこと ・明日生きている保証はないことはわかるがそれでもまだ関係のないこと ・深く難しいこと ・死んでも忘れない ・生きたくても生きられない人、生まれる前に死んでしまう子もいる。自分は生きているだけで幸せ ・死は死んだ人より、残された人に向けられた文字 ・死は過去のことで美化される ・死に行く人のよい点や感謝の気持ちを見つけることができる ・「死」を考えると人は一人では生きられないことがわかる ・わからない(3) ・普段は死を意識していない ・死んだ人には絶対会えない
3. 死の普遍性	<ul style="list-style-type: none"> ・誰にも訪れる(3) ・自分にも起こりうること ・生き物はみな経験 ・宿命 ・避けられないもの ・父とペットの死から「死」があることを実感
4. 民族的受け入れ	<ul style="list-style-type: none"> ・またどこかで会えると思う ・魂はまた人間の肉体に入り生まれ変わる ・見守ってくれる存在 ・死んだらどこに行くのか ・運命が決まっているのか ・記憶はないが新しい人生が始まる ・体はどうなるのか ・天国や地獄があるのか疑問
5. 死に向かって (どちらかという前向き)	<ul style="list-style-type: none"> ・死後の世界よりもどんな風に生きたかが大事 ・死ぬ瞬間に悔いのない人生だったと思えるように生きたい ・自分がかんばって生き続けたい ・自分の人生に満足して笑って死にたい ・自分が死ぬことを怖く感じないで幸せな人生だったと思えるような「死」を迎えたい ・毎日を大切に悔いのない様に生きよう ・命は大切にすべき ・「今」を大切に、精一杯生きたい ・どう生きたかが肝心 ・死を恐れるより、1日を大切に生きることが必要 ・「死」が自分にいつ来るかわからないから心においておきたい ・思い残すことがないと思えてから死にたい(2) ・最近の事件を見て自分の人生は自分で生き抜いて死を迎えたい ・「死に様はその人の生き様が現れる」というが、そのとおりに思う ・「死」というものはいつも近くにあるものだと思って生きたい
6. 死にむかって (どちらかという不安、やや非現実的な希望、後ろ向き)	<ul style="list-style-type: none"> ・死にたくない ・経験したくない ・この世にあってほしくない ・「死」を迎えるときはいつなのかどんな気持ちか、どのような死なのか ・明日死ぬかもしれない(2) ・自殺や他殺はいや ・いつ死ぬのかを考えてしまう(2) ・不老不死があるとよい ・死なないでずっと生きていたい ・身近な人に死んでほしくない ・みんなに長生きしてほしい ・考えることを避けてきた ・祖母の死から死について考えたくない ・逃げているかもしれない ・死と向き合う必要性は理解しているがそうしたくないという矛盾が生じている ・大切な人とずーっと生きていたい ・誰も死なないでほしい ・90歳くらいなら死んでもよい ・一人も死んではいけない
7. 社会と関連した死	<ul style="list-style-type: none"> ・世の中は死を軽視 ・殺人場面は子どもに見てほしくない ・子供には未来が明るいものと思っ

し、体験から時間があまりたっていない場合、死者に対し、「感謝の気持ち」を見出すことができても(表3-2)、悲しみやつらさ、後悔の念などにつながっていき、怖くて暗いイメージ(表3-1)と答えた学生もいた。

死の持つ意味も、「わからない」「自分とは関係がない」「肉体の死」など普段余り意識しないという記述の一方で、これまでの体験の中から「死を考えることで人は一人で生きられないことがわかる」「『死』は残された人に向けられた文字」などと述べた学生もいた(表3-2)。また、「死んだ人には絶対会えない」と、述べる学生と「またどこかで会える」「生まれ変わる」など、文化的、宗教的な影響と思われる記述をした学生もいた。死に向かって比較的前向きと思われる記述として「自分が自分の人生に満足して笑って死にたい」「自分が死ぬことを怖く感じないで幸せな人生だったと思えるような『死』を迎えたい」などがあつたが、「いつ死ぬのかを考えてしまう」「死にたくない」「不老不死があるとよい」「90歳くらいなら死んでもよい」「大切な人とずっと生きていたい」の記述もあつた。また、近年特有の問題として「脳死は死と認めても臓器提供は考えられない」という記述も1例見られた。

2. 第2回グループワークの結果

26名を2つのグループ(A・B)に分け、自由に話し合う機会を持った。テーマは、①子どもの頃、「死」をどのように捉えていたか。②現在「死」をどのように捉えているかである。重いテーマであることと環境的な要因(Aグループは広いホールの一隅、Bグループは声が外部に漏れない小会議室)のためか、Aグループは積極的に発言する様子が見られず、筆者の一人が司会をして発言を誘導する必要があつた。しかし、第1回のアンケートに記述していることから発表がしやすいという側面もあり、Bグループは時に涙しながら進行する場面が見られた。

(1) Aグループの結果

① 子どもの頃は「死」の存在を意識しないレベルから、自分にも「死」があることを漠然と理解して、悪いことをしないようにしたり、舌を抜かれる恐怖を感じたりしていることがわかっ

た。さらに、幼少時でも身近な人の死を悼んだり、「死」について「死後どこへ行くのか」を考えるなど概念的にとらえようとする姿勢があつた。

② 現在「死」をどのように考えているかについても、あまり活発な意見は出なかつた。仏教的な考え方が浸透しているのか「生まれ変わりたい」という意見があつたが「楽しめるなら」という条件付であつた。「死」ということを「死に方」ととらえ、「汚い死に方はいや」と視覚的なとらえ方をしている学生もいた。また、霊を見ることができると考えている学生もいた。「死」は生の延長線上にあり、しかたがないことととらえているが、「死」に関する発言はすべてどちらかというマイナスのイメージで「生きること」につなげて発言した学生は少なかつた。「これからどう生きていくかしか考えられない」と発言した学生もいたが、この学生も自分が死ぬ存在であることを想像できない、死ぬことを考えるより生きることを考えていたいと述べ、深く考えることに躊躇している様子を感じられた。延命措置に関する発言も見られた。

(2) Bグループの結果

① 母親がそばにいないこと(朝起きたら居なかつた、留守番)と関係し、不安になったときに「死」と結びつけていた者が2名、祖父母の死によって、死んだらどこへ行くのだろう、自分が存在しないということはどういうことだろうと考え怖くなった、臆病でいろいろ考え、突然死んだらどうなるのだろうとただただ怖かつた、老いたら死ぬと思っていたなどがあつた。また、死んだ後、星になる、いつもそばで見守ってくれている、死ぬと会えなくなる、また天国か地獄へ行くのでどちらへ行くか怖かつたなど、幼少期の「死」は、全般的によくわからないこと、怖いこと、かわいそうなこととして捉えている。現象面において、「死」に際して痛そう、苦しそうと捉えている者もいた。「死」は自分には無縁で、生き返ると思っていたという者も1人いた。

② 「死」について考えること自体嫌で考えないようにしている、ぴんときなかつた、深く考え

たことはないという学生があったが、現在では何らかの「死」（祖父、祖母、いとこ、同級生の自殺、親戚、知人）に直面した者が多く、その経験によって命のはかなさ、悲しさ、辛さを身近に感じている。また、そこから、「今」を大切に生きたい、「死」はいつ起こっても不思議ではない、今もそれらの「死」が受け入れられないでいるなどの意見があった。しかし、なぜか自分は死なないと思っている、楽しい人生ばかり想像している、「死」は誰もが経験しなければならないのでくよくよ考えてもしかたがないと考えている者もいた。

3. 第3回・第4回 講演要旨

(1) 畑野寿子さんの講演要旨

プロフィール

平安女学院保育科を卒業し、小児科医の妻として医療活動を助ける傍ら、約60年の教会学校教師暦を持ち、常に子どもとともに居て神の愛を伝え続けている。特に16年前よりの活動として、胎児への語りかけ、母親（両親）への語りかけを実践されている。今回は、この事とともにこれまで関わって来た事例に基づいて貴重なお話を聞くことができた。

[胎児クラス]

この60年間は、生命の始まりと生命の終わりにかわる人生であった。16年前、一人の日曜学校の教師の出産がきっかけで、胎児クラス（カンガルークラス）を持つという夢が実現した。それは、聖書に胎児という言葉が47回も出てくると、神の子どもへの深い愛とまなざしを具体的に受けとめ知らせたいということと、同時に子どもが生まれようとしているときの夫は妻である愛する女性になすすべもなくたたずむという現実を見てきたことからである。

聖書の代表的な箇所は、エレミヤ書1:5とルカによる福音書1:41である。ルカには、マリアがエリサベトを訪問したとき体内の子が踊ったという記述がある。近年、赤ちゃんや胎児の研究が発達してきたが、昔は赤ちゃんが何もできない無力な存在と思われていた。小児科医だった夫のもとに送られてくる医学雑誌に、胎児や赤ちゃんの能力などの特集が掲載されるようになり、「誕生の記憶」という本も出版された。このような流れを見ずとも、「胎児はひとりのりっぱな人格を持った人間」であるということ強く認識する必要がある。現在胎児クラスは、82人目で、お腹の子どもは双子で

ある。

胎児は、受胎6週目で脳波が認められ、5か月で外の音が聞け、7か月で心電図がとれる。（*ここで、受胎6週目の胎児人形を学生にまわす。アメリカの出産カウンセリングセンターで使用している小学生へ生命の神秘と尊さを教えるためのビデオをくださった）

子どもが生後、話ができるようになると、お腹のなかのことを覚えている子どもが何人もいる。また、出産後1週間で退院した赤ちゃんが翌日血を吐き、病院に行った。昨夜何かありましたか？と医者から聞かれ、夫婦がすごいけんかをしたことが原因で赤ちゃんが急性胃潰瘍になったという例もある。

胎児クラスへ来ることができない人もあるため、毎週ひとりひとりの子どもと両親のためにテープを作っている。胎児へ語りかけるとき、私はとても優しい気持ちになる。ハイドンのオラトリオやクラシック音楽を流し、聖書の言葉を読んだり子どもの賛美歌を入れる。そして、お腹の子どもへ語りかける。赤ちゃんは好きな賛美歌や音楽がある。泣きやまないとき、好きな賛美歌を聴くと泣きやむ。お母さんも赤ちゃんもこのテープを聴くと平安になる。そして、夫はこの生命の不思議に立会うことによって、より妻を愛し、また神を信じるようになり、多くのクリスチャンホームが生まれている。

82名中、一人の子どもが生後すぐ亡くなった。その子どもはやっと与えられた赤ちゃんで、夫婦で胎児クラスに通っていた。夫は赤ちゃんのお風呂の入れ方を練習し夫婦でいろいろな準備をした。しかし、子どもが亡くなった知らせを受け本当にショックだった。病院に駆けつけると、お母さんは私に「心配しないでね。私は、もう変えられました。今までどうしても許すことが出来ない人がいました。しかし今許すことができました。今人生でこんな平安はありません。」と言った。父親は、小さな棺を前に「さあ！見てください。この子の名前は『はじめ』です。私の妻は私の赤ちゃんを10か月の間こんなにりっぱに育ててくれました。」と誇らしげに見せてくださった。（*ここで、天国の特別な子どもの詩を紹介、学生の一人が朗読する。）

また、胎児クラスでは高齢出産で障害を持って生まれた子どもがいる。この子は今、養護学校の中学2年生。時々痙攣を起こし、両手を持ってもらわないと歩けないし、ものが言えず笑っているだけ。でもこの笑顔がすばらしい。誰でも彼の笑顔を見ると怒ってられない。長い間いろいろな病院を巡り歩き、数年前にやっと「エンゼル症候群」という病名がわかった。まさに家庭に教会に舞い降りてきた神さまが遣わしてくれた天使である。

[死に立ち会う]

命の終わりにかかわることは自分から求めたことで

はなかった。しかし、日曜学校の子ども（ひろ子ちゃん・5年生）が白血病で亡くなった。毎年、亡くなった日にお友だちが集まって、ひろ子ちゃんの家で分級をしていた。来年は大学生になり皆散り散りになるので、8年目となる今年、記念誌を作ることになった。これを見ると両親やお友だち、皆のなかにその命は生きていと強く感じる。大好きな絵本「忘れられないおくりもの」のあなぐまさんとひろ子ちゃんが重なり合う。お母さんやお友だちの中にひろ子ちゃんは生き続けている。そして両親はクリスチャンになった。

それからいろいろな人の死にかかわってきたが、今日は一人の忘れられない青年のことを話したい。訪ねて欲しいと要請されたその青年は末期の咽頭癌で様々な問題を抱えていた。初対面で不安だったが最初から不思議と心を開いてくれた。

この青年が登校拒否で家に引きこもっていたとき、「あの子さえないければ」という両親の話を聞いてしまった。絶対言ってはいけないこの言葉によって青年は家出をしたが、3度も引き戻された。抗癌治療は苦しく、訪問を待つようになった。「こんな苦しい時にそばにいないとだめじゃないか」と怒ったり、癌の脳への転移のため時々錯乱状態になる。彼は様々な新興宗教すら求めた。食事が喉を通らず神経性の下痢を起こす。そんな状態にもかかわらず誰にも言わないでノルウェーに行ってしまう空港で倒れた。大使館から家に電話があり、ドクターとナースがついて日本に送られてきた。いくつかの病院に移されたが最後は、あるキリスト教の病院で洗礼を受け、両親とも和解し父親は彼と同じベッドで寝た。母親はそばを離れなかった。青年の最後の言葉は「畑野さんと友だちになったらいいよ」であった。両親はクリスチャンになり、青年の言葉通りとても良いお友だちになった。

生まれてくると死ぬことは、子どもに常に示していかなければならないと思う。イエスさまの生命に子どもは出会う。その例を数多く見てきた。胎児クラスの子どもの最初の子どもは、障害を持っており、小学1年生の時はいじめにあっていた。車いすでキャンプに出席した時、ある同級生が「お前なんでこんなものに乗ってるねん。歩けへんのか」と言った。しかし、そのすぐ後、その子はなんでこんなことを言ってしまったのだろうと後悔し「ごめんね！ ぼくの友だちになってくれる？」と言った。2人はそれから3日間離れなかった。それから、その子は人の痛みのわかる子へと成長した。

日本の教育は「死の教育」をしない。「人間は死に向かって生きてるんだ」と書いた3年生の作文に、担任の先生は、「そんな暗いこと書くな！」と怒った。できるだけ子どもから死を遠ざけようとする。私にできる最後の教育は自分の死体を子どもたちに見せること。しかし、死は私の終わりではない。死は生命の終わり

ではなく、命を突き抜けて続く永遠の生命があることを伝えたい。（*ここでNHKで放映された「輝け！いのちの授業」本にもなった大瀬校長のことを紹介。）

(2) 鈴木中人さん講演要旨

プロフィール

鈴木中人さんは豊田市在住、1957年生まれの会社員。1992年、当時3歳の長女、景子ちゃんが、突然「神経芽細胞腫」と宣告される。1995年、闘病の末、景子ちゃんは家族に看取られ天国へ召された。後に鈴木さんは「がんの子どもを守る会」の活動を始め、現在は東海支部の代表幹事をつとめている。著書「景子ちゃんありがとう」（郁朋社）「命のバトンタッチ」（致知出版）がある。

1957年に生まれ、会社員となり、結婚して2児を授かるというごく普通の、幸せな家庭生活を送っていた。ところが、1992年、当時3歳の長女、景子ちゃんが、突然「神経芽細胞腫」という小児がんにかかっていることが判明した。入院の時、景子ちゃんはたった3歳でありながらも自分のことより祖父母宅に預けられる弟のことを心配した。景子ちゃんの入院により、家族が一緒にいるあたりまえのことをとても幸福なことに改めて感じ、景子ちゃんの回復を祈った。わが子の長い入院生活の中から、子どものためによい医療を確保すること、生きる希望を与えることの重要性を痛感し、お姫様が大好きだった景子ちゃんのために病気がよくなったらディズニーランドに行くことを約束した。景子ちゃんはそのことをとても楽しみにして病棟のスタッフみんなにその話をした。その反面、ある晩景子ちゃんは「私、死んじゃうの？」と涙を流した。家族の不安を通して3歳児でも死を身近に感じるとのではと思い、それから景子ちゃんの立場に立って、行われる治療をわかりやすく説明することにした。それによって景子ちゃんは痛い治療を泣きながらも我慢して受けるようになった。さらに、見知らぬさまざまな人の善意によって届けられた輸血パックにペコッと頭を下げ「ありがとう」と言う景子ちゃん、一時退院のときに遊びに行った公園では「バイバイ、またね」ではなく、遊んだお友達に「ありがとう」と言って別れる景子ちゃんからさまざまなことを学んだ。

多くの困難を乗り越えて、がん細胞がからだから発見されない寛解という状態に入ることができた景子ちゃんは治療を続けながらも家庭に帰り、保育園入園を許可された。入園をめぐる心無い人の言葉に怒りを感じたこともあったが、ついに「どうぞ、安心してきてください」という保育園がみつかった。治療のため

にほかの子の半分くらいしか行けなかったが、保育園にいる時間は景子ちゃんにとってお友達と同じ「普通の子ども」になれる貴重な時間だった。

発病して2年後、長い治療の末の最終検査を受けたとき、脳への転移が発見された。最初の発病も、再発の兆しも見つけてやれなかったことで言葉を失った。しかし、苦悩の末、景子ちゃんに「輝きのある1日」を返してあげること、家族全員で安らかに看取することを決意する。景子ちゃんにとっての「輝きのある1日」は特別なことではなく、保育園へ行く、家族みんなでご飯を食べる、公園に遊びに行くというごく普通のこと、それが一番景子ちゃんが輝く瞬間だった。病院に泊まらなければならないとき、景子ちゃんは母親に「お母さん、ごめんね。私が病気だからずっと病院にいくちゃいけないね。ごめんね」と言った。妻は景子ちゃんが寝た後、トイレで泣き続けた。病状は重かったが、小学校入学の日を迎えた。5月には車椅子になり、午後は輸血のために病院に戻りその間に宿題をして家に夜9時ごろ帰るとい生活が続いた。大人でもつらいこの生活を景子ちゃんはお友達に会いたい一心で続けた。その姿は「死んでしまう子ども」ではなく、「生き抜いている子ども」「命が輝いている子ども」として家族の目に映った。

ある日、景子ちゃんは弟のお迎えをするといって車で卒園した保育園に行った。そのとき景子ちゃんの病状はいっそう重く歩くことができなかった。景子ちゃんは先生に心配をかけまいと何とか歩こうとしたが断念しておんぶして中に入った。大好きな先生と再会して帰るとき「さよなら、さよなら、さよなら」と肩越しに小さな手を振る景子ちゃんの姿は、お世話になった先生にお別れの挨拶をしているように感じられた。その日の夜、激しい痛みが襲って病状が急変し景子ちゃんは病院に戻ったが、少しでも気分がいいと、次に行ったときに困るから宿題をするといって体を起こしてもらおうとした。景子ちゃんのがんはあらゆるところに転移して、腹水がたまり呼吸さえ苦しいのに、5文字、1行を「ハーッ、ハーッ」といいながら5分も10分もかけて書いた。

95年7月5日、景子ちゃんは家族が見守る中、一人で天国に旅立った。

景子ちゃんが亡くなった後、がんの子どもを守る会の活動や、本の執筆などを通して、「生き抜くこと」「支えあうこと」の意味について考え、そして、「難有」はじつは「ありがとう」に通じていることなどがわかってきた。

講演後、学生は印象に残った言葉をひとつずつ記述。普段とは違った意味で「ありがとう」を捉えた学生、自分は今一生懸命生きていないのではと感じ「生き抜く」を書いた学生「支えあう」と書いた学生もいた。

4. 第5回結果（講演と授業全体についての感想；

(1)～(5)は要約抜粋)

(1) 畑野さんの講演から

① 畑野さん自身について

日曜学校ばか（*演者が差別的な意味あいを用いたのではないため文中ではそのまま掲載；筆者注）と呼ばれてうれしいと言われ、様々な年齢層の人から「かあちゃん！」と呼ばれていると聞き、きっと数え切れない人の大切な「かあちゃん！」なのだろうと思った、生涯をかけて人に伝えていこうとする姿に感動した、畑野さんが死んだら自分の体を子どもたちに見せ、「死」というもの、またその先にあるものを感じさせるなんてすごいと思う、何かひとつのことをやり続けることはすばらしいと感じた、病気の青年との出会いは、畑野さんが青年を心から愛したから、親に「畑野さんと仲良くなれよ」と言わしめた、生きることと愛することは深いつながりがあり、どんな人でもその人を愛し信頼すれば、同じように愛してくれると感じた

② 胎児クラスについて

胎児クラスがあることに驚きを感じた、胎児のことは授業などで聞いていたが、生まれてきた子どもが胎児期の記憶を持つことは本当なのだと思う、高齢出産の方の子どもが亡くなったことから、生まれてきてからが生きるのではなく、生まれる前からずっと一緒に生きていたことを強く感じた、親の自覚につながり、子どもをより愛することができる良い機会と感じた、胎児と両親の大切なコミュニケーションであると教えられた。

(2) 鈴木さんの講演から

① 鈴木さん自身について

淡々と話されたことによりかえって自分の子どもが先に死ぬということがどれだけ辛いことか伝わった、逆境を乗り越え話してくださり、景子ちゃんの心が私たちにバトンタッチされていると感じた、景子ちゃんは鈴木さんによって語られ、意味のある、価値のある人生を生き抜いた、思い出すことさえつらいことなのに、人に伝える使命を感じておられると思った

(3) 景子ちゃんについて

子どもが「死」を理解することはできないと思っていたけれど、景子ちゃんは五感や本能で死を感じていたのかもしれない、「死」は景子ちゃんにとって恐怖だったと感じたが、なぜあんなにやさしく強い子でいられたのだろう、輸血パックに手を合わせて「ありがとう」と言ったことは私にはきっとできないことだと思う、「私、死ぬの?」と3歳の子が聞いたこと、弟の心配をしたことなどから私たちが思っている以上に子どもは人の気持ちや状況が分かるのだと思った、景子ちゃんは幼いのに私よりずっと一生懸命生きたことを感じ、これが本当に生きるということだと思った、景子ちゃんの人生は短くても輝いていた。

(4) 生きること・死ぬこと～自分と関連づけて

「死」は、いつかやってくるのだから考えなくてはいけないと思った、死んだらそれで終わるのではなく誰かと共有していくことで永遠になると思った、どれだけ「死」について教えてもらっても心では理解できないが、自分がその立場になって初めて分かるのではないか、自分が景子ちゃんの保育園の先生の立場だったら一体何ができるのだろうと思うと同時に、先生や友だちの存在の大きさを知った、自分が死ぬのはずっと先と思っていたが、私の考えはまちがっていた、景子ちゃんのことを知ることができてよかった、景子ちゃんが時空を超えて、生きる大切さや一生懸命生きることのすばらしさを伝えてくれていると感じた(後述学生 A)、支えあうことは信頼し合うことで、生きること、愛することとは繋がりがあろうと思った、肉体はなくなっても皆の記憶や心の中で景子ちゃん存在はある、生きていると思った

(5) 全体を通して

① プログラム(テーマそのもの)について

今まで「生きること」「死ぬこと」を軽く考えていたと反省した、最近「死」について多くの情報があるが本当は考えたくないと感じていた。しかし「死」を考えることは、今を大切に生きようという思いや周りの人をもっと大切にしようという思いを与えてくれるとわかった、初めて「死」についてきちんと考えた、皆と討論する中で、いろいろな考え方があることを発見し、自分の中で明確になったわけではないが、少し変わった気がする、「死」への恐怖感が減り、逆に大切

なことなので受けとめることが必要だと感じた、重いテーマだが共感し合って話し合うことができた、考えることがプラスになるとわかった、今問題になっていて、子どもに伝えなければならないのは「死」の問題だが死ぬことがどうということかわからないことが問題ではないか、お二人の話聞いて「死」を認めること、「死」を通して学ばなければならないことが必要だと感じた、講義を受け、ニュースなどで流れてくる「死」も、今までと違うように感じるようになった、こんなに深く「死」を考えたことがなかったので、「死」を考えていく中で自分が成長したように感じた(後述学生 B)、「死」についてマイナスイメージばかりだったが、「死」を考えることは、命に限りがあること、日々人に愛されていることを実感でき、日々の生活を振り返る機会となる、「死」は思っていたより身近なことであると思った、このプログラムを終えた今も「死」はどこか漠然としているが、今生きていることが当たり前ではないということがわかった、「死」は意外と身近にあり、それは突然やってくるかもしれないと思うようになった、こういう機会がなかったらこんなに真剣に考えなかった、「死」について考えることは「生」を考えることに繋がっているという発見があった、生きている価値は自分では分からないが、誰かにとって私が生きていることが意味があり、誰かは私にとって意味があることと感じた、今まで「死」について考えなくなかったが、命の限りがあるまで生きていかななくてはならないと教わった、死ぬことは辛く悲しいことにならないが、怖れることはなく、そして一生懸命生きることがこの世に生まれしてきた私にできることではないかと思った、以前より自分なりの「生と死」の意識を持つことができた

(6) 3名の学生の感想(記述のまま)

① 学生 A

設問 1

畑野さんのお話から感じたことは、彼女の生涯をかけて人に伝えていこうとするそんな姿を感じました。畑野さんの学生時代、戦時中の世の中が混乱と貧しさ、悲しみや怒りやそういった色んなものがうずまいていなかで、それでも幼児教育がしたいと希望を持って、なりたくてしかたなかった。そう話している畑野さん

を見て、今の私たちとなんて環境が違っていたのだらうと思いました。「幼児教育を志す学生」という点では同じであっても、私たちは設備にも恵まれ、充実して何不自由なく学び、就職先もいずれ決まるでしょう。そういった恵まれた環境の中でさえも、将来の希望に不安を持ったり迷いがあったりする人が大勢います。恵まれない環境の中でも、自分の志を通した人もいる、また、志してもかなえられなかった人もいるということも覚えておかななくてはならないと思いました。

また、病気の青年との出会いについてもですが、本当どれだけの苦労があったかもしれませんが初心を貫いたということはすごいことだと思います。われわれはボランティア精神というのはちょっとした気持ちでできるものですが、もしそれが自分の生活に影響が及んだり、とても大きな苦しみをともなうものだとしたら避けてしまうことが大半です。私もその中の一人なので、なかなか人と関わりを持つボランティアはできません。継続して続ける覚悟があるかどうか、関わった人にたいして、自分の言動や行動に責任がとれるかどうかまだ自信がないからです。畑野さんの場合はボランティアとは違いますが、ただ単に、「気の毒な青年がいるから会いにいったらあげよう」といったことに終わらなかったということにとっても考えさせられました。それが良い事、悪い事というのは別にして畑野さんは一人の人間を少しでも幸せにしてあげられることができたということなのでしょう。

そして畑野先生はご自分が死んでしまったときは、ご遺体を子どもたちに見せてあげてくださいといっていました。自分自身の死をもってまでも人に何かを伝えていくということにとっても胸打たれました。私も言葉ではあまり言い表せませんがそういった畑野さんの姿を見て、何かとても大きなものを得たように感じました。

設問 2

鈴木中人さんお話は5分ぐらいから涙がポロポロ出るくらい感情移入してしまいました。つい昨日のことですが、夕食後に鈴木さんの「いのちのバトンタッチ」という、先生からいただいた本を母に読んでみてはとすすめました。

その後私はお風呂に入っていて出てきたときに母が本を読みながら号泣していたので、「ああ、本を読んだだけでもこんなにも鈴木さんの気持ちが伝わっているんだなあ」と思いました。直接話を伺った私たちは尚更です。そこかしこで泣いている私たちと対照（原文訂正）に鈴木さんはたんたと最後まで涙することなくお話をされました。私は鈴木さんが涙ぐまれてしまうのではないかと心配したのですが、それよりも私たちに伝えることを大切にしてくださったと思い、ありがたく思いました。人によっては娘さんが死んでしまったことはとても悲しいことであるし、もう触れてほし

くない、心の中にしまっておきたいようなことであるかもしれません。鈴木さんもきっと何度か講演されているでしょうから少し慣れてきたところもあるでしょうが本当に話をするときだけ悲しい思いもしたことでしょうか。もしかしたらその気持ちは今も変わらないかもしれません。そういった、ある意味で悲しみであり、傷ついた心を背負いながらもそれでも娘さんのメッセージを誰かに伝えていきたい。そういった気持ちをとても感じました。それは私にもとても大きく伝わったことです。鈴木さんのお話を聞いていて、景子ちゃんが時空を超えて私たちに何かを伝えてくれる。その何かってというのは生きる大切さと一生懸命生きることのすばらしさ、私たちへのエールです。それが「命のバトンタッチ」ということなのだと思います。生きるっていうことを大切にしていきたいです。

設問 3

はじめは「死について」などといったことがあまり触れたくもない部分であり、考えたくもなかったことだったのですが、お二人のお話を聞いてだんだんと考えが変わってきました。今回のテーマは「死について」だったのですが（アンケート、討論の内容など）お二人のお話から感じたことは死についてというだけではありません。一生懸命生きるってことです。死について考えることは、どこかで今生きている命について考えることにつながっているのかもしれませんが。この間学校の絵本展を見に行き「死についての絵本」を全冊読破しましたが、その後湧き上がってくる気持ちは決してむなしさとか生命に終わりがくることの悲しさだけじゃなく、今生きていることの大切さ。周りの人が生きていてくれることに対する感謝でした。特に子ども用の本なので「ペットの死について」が多かったのですが、そのとき、今飼っている犬のリーちゃんのことについて思いました。忙しきにかまけてろくに遊んであげてもいませんが今まで何度リーちゃんにはげまされ、というかはげまされたわけではないのですがその存在が私の心をなごませたり触ってリラックスできたり、そういった沢山のことを与えてくれたのだらうと思いました。その日家に帰ったときは自然にリーちゃんにいっぱい話しかけていました。リーちゃんは来週手術をしますが、絶対に成功してほしいですし病気が治ってほしいです。死の予感を少しでも感じたときにやっとその命の大切さに気づくこともあるのですから、普段は今生きていること、その感謝を忘れないようにしたいです。

② 学生 B

設問 1

畑野さんのお話の中で胎児のときから母親、父親は子どもをかわいがって、子どものためにいろいろな知識を身につけたり、教会へ通ったりしていると聞き、

とても温かい気持ちになりました。やはり、子どもが生まれてくるということは、その子ども自身の人生の中でも一番大事なことだけど、両親にとっても本当に大きな喜びを感じられることなんだということに改めて気づかされました。自分もきっと両親や周りの人から愛されて生まれてきたんだと思うと、少し照れくさいけれど、とてもうれしいし、なんだか自信が沸いてきます。また、畑野さんのような愛情にあふれている方が胎児クラスを見てくれることで、お母さんやお父さんに、もっともっと赤ちゃんをかわいがる気持ちを与えているような気がしました。私もそんな愛情のある人になりたいです。お話の中で中絶のことにも触れていましたが、ちょうどニュースで胎児をゴミとして捨てていた事件があったと聞き、本当に心が痛くなりました。信頼されなければならない人、人に赤ちゃんについての知識を教えるべき人が、胎児の手足を切断して捨てるなんて、信じられません。もっと深く“生”と“死”について考えてほしいです。また、子どもを墮ろすことは、やっぱり殺人だと思います。自分たちの不注意で妊娠して、生まれてくると困るから殺すなんて、なんて自分勝手なんだろうと思います。このことも、大人がもっと“生”と“死”について考えれば、なくすことのできる問題な気がします。畑野さんのような心をみんながもてたらいいな……と感じました。

設問2

鈴木さんのお話は、とても悲しかったです。自分の子どもが3歳で発病したら……私は見ていられないかもしれない、精神がおかしくなってしまうかもしれないと思います。鈴木さんがそのような悲しい経験を人に伝えるのは、とても苦しいことだと思うのに、話をしてくれて本当にありがたいと思いました。景子ちゃんは6歳で命を終わって(筆者訂正)しまったけれど、様々な人から愛情を受けて今でも鈴木さんによって生き様が語られている……とても意味のある、価値ある人生を生き抜いた立派な人だと思います。私は子どもは“死”なんて絶対理解していないと思っていました。でも景子ちゃんのように“死”が近いところにあると“死”がわかり、恐怖を感じるようになりました。そんな小さい子が死の恐怖を味わっていたと思うと本当に心が痛みます。また、親が子どもに先に死なれることが、どんなに辛いことかわかりました。私は、自分が悲しむのが嫌で、親の死を見たくないと思っていました。でも親が私を生んでくれたお礼に私が親の死を見届けたいと感じました。悲しいけれど、それは親の子どもである私にしかできないことなのかもしれません。いろいろなことを考えさせられる深いお話でした。

設問3

こんなに“死”を深く考えたのは初めてだったので

“死”を考えていく中で、自分が成長したような気がします。やはり“死”そのものは未知だけれど、誰もがいつか死ぬかと思うと、“死”までにどんな生き方をするかとても大切だと思います。そしてやはり、生きていることは、絶対意味のあることだと思います。生きている価値なんて自分にはわからないけれど、誰かにとって私が生きていることは意味のあることで、私にとって誰かが生きていることは意味のあることだと思います。一人一人は、この広い世界、地球、宇宙の中で本当にちっぽけな存在だけれど、一人一人に喜怒哀楽があり、“生”が与えられているのだから、その人生を生き抜かなければならないと思います。こんなにすばらしいお話やみんなの考えを聞けて、本当によかったと思います。私たちだけ聞くのもちょっと残念だと思います……。礼拝とかで、ほかのみんなにも聞いてほしかったなあ……と思います。

IV 考察

日々私たちの周りで報じられている「死」の要因は、事故や災害、病、殺人、虐待、戦争、自殺、テロ、貧困・餓え、孤独死等々であるが、なんと多くの「死」に取り囲われているのだろうか。しかしながら、逆に「死」は遠くなり、命への感覚の麻痺・希薄さが憂いとなっているのが現状である。

今回の研究は、このような危機とも言える時代に乳幼児を育む営み＝日々のちと向き合う仕事に就こうとする学生とともに「生と死」を考えるプログラムを試みたものである。

緒言にあるように、近年このような取り組みはすでに様々な形で試みられ、徐々に広がりつつあることが知られている。

筆者らは、全5回のプログラムを組み、第1回のセッションでは、6つの質問に記述によって応えるということを通して、まず学生の子どもの頃の「死」への感覚を把握するところから始めた。ミラーは、私たちの死に対する態度を理解するひとつの方法として、子どもの頃どう感じていたかを思い出すことは有効であると述べている⁶⁾。なぜなら、子どものときの情緒的反応は多く大人へ持ち越されると考えられているからである。その結果、質問①は今回の対象者26名中8名が「死」について、「何もわかっていなかった」「考えていなかった」「死は遠くにあった」「死は動かなくなる」「居なくなる」(喪失感ではなく)などと考え

ていた。その他は何らかの概念を持ち始め、死ぬと天国や地獄で暮らす、星になる、生まれ変わるなどと考えている。また、そのうちの3名の学生が、死を恐怖や不安として感じている。それらは、母親の不在（朝起きたとき居ない、留守番など＝死んだのではないか）や怖い夢（追いかけられる、殺される）などによっている。これらは深層心理学の分野における研究では発達と大いに関わっているとされているが、今回の主要テーマではないので考察は割愛する⁷⁾。また、根源的な問いとして『死ぬってどんなこと？』と父母にいつも尋ねていた」「どうしようもない真実」などと感じていた学生もいる。しかし、学生の幼児期の「死」は、まだ遠くにあると考えられる。

質問⑥は、現在「死」についてどう思っているかという問いであるが、質問②から⑤までを含め①と比較してみると興味深い。彼女らの幼少期から19～20歳までにはすでに多くの「死」が存在していることが分かる。緒言に、交差する世代のすべての死と出会うとあるが、まさにその通りであり、もの心ついてからの「死」は、鮮明に記憶している場合が多い。父親、祖父母、曾祖母、おば、友人の兄、知人など26人の内、延べ27人の死を経験していることになる。身近な人の死の経験から、死は突然やってきて、それ故理解できなかつたり悲しみを覚えないことすらあること、また棺に花を入れるとき急に悲しくなった、冷たく人形のようにであった、時間の経過とともに悲しく辛くなったなど「死」のリアリティを強く感じている表現が多い。そして、「死」はいつでも起こりうるもの、全ての人が迎えるもの、「死」はいつも隣り合わせ、全ての人が迎えることだから怖がることではないのかもしれないという意見があり、「死」の普遍性を感じている学生もいる。身近な「死」を経験した者からは、ショック、恐怖、悲嘆、追悼の心、後悔（わがまをぶつけてしまったのに可愛がってくれていた曾祖母に対して）などの心の体験をしていることがわかる。その一方、「死」は悲しく辛いものだから経験したくない、自分と「死」は関係ない（死ぬとしたら寿命で死にたい）、私は絶対死なない、よく〈心の中で生きている〉なんて言うけどそれはだめ、死にたくなつてから死ねるといいなど「死」を本能的に回

避する意見を述べている学生もいる。

アルフォンス・デーケンは、「生と死の教育」において、死への不安や恐怖は万人に共通するものがあり、またその類型を知ることは、過剰な恐怖や不安をノーマルな状態にまで緩和するためにも必要であるとし、9つの「死への恐怖と不安」のタイプを挙げている⁸⁾。それらを列挙すると1 苦痛への恐怖・2 孤独への恐怖・3 不愉快な体験への恐怖・4 家族や社会の負担になることへの恐れ・5 未知なるものを前にしての不安・6 人生の不安と結びついた死への不安・7 人生を不完全なまま終えることへの不安・8 自己の消滅への不安・9 死後の裁判や罰に関する不安である。

この時点での学生は、4を除き、ほとんど全てが該当するのではないかと考える。特に、思春期にある学生たちにとって5・6・7は強いように思われる。

また、可愛がっていた小動物やペットの「死」を経験し、心の傷（二度と生き物は飼わないと決めた）となつて残っている者が多く、そこから命への感覚が芽生えたと思われる記述が多かつた。

2グループに分けてのディスカッションは、第1回の記述式のアンケートを踏まえ、しかしそれに留まらず自由に発言することがねらいであったが、必ずしもその通り進行しなかつた部分もある。全般的に言えることは、自分の意見を発表し分かち合うことの意義である。まず、このようなテーマで話し合ったことがかつてなかつたことから、「生と死」に関するお互いの考えや体験を聞く機会となつたことである。感想から見られることは、自分以外のいろいろな考えがあるという発見をしたこと、そこから共感し合うことができたこと、更に発表することによって自分の考えを確認できたこと、忘れていたことやそのときの想いを思い起こす機会となつたことなどである。辛く悲しい思いをした人、現在それを乗り越えつつある仲間が存在を知ることができたことは、喪失体験をした人々だけではなく、体験のない者にとつても励まされることであり、有益な体験となり得たと考えられる。

第3回・第4回の講演については、学生の感想（第5回）の中からいくつかのポイントを挙げて述べてみたい。

結果で述べたように、畑野寿子さんのこれまでの生き様に感銘を受けた記述が多かった。「日曜学校ばか」と呼ばれることが光栄で喜びとしている姿、生涯をかけて人に伝えて行こうとする姿に感動したなどの感想が見られた。また、自分自身の体を見せてでも、子どもたちに「死」の現実を伝えその先にあるものを感じさせようとする気迫、何かひとつのことをやり続けることの意味を学生は感動をもって受けとめている。このことから一人の人間としてのモデルに出会うことの重要性を感じる。特に若く感性鋭敏な思春期や青年期に出会うことは、その後の人生に大きな影響を及ぼしていくものと思われる。

胎児クラス(カンガルークラス)については、まずそのようなクラスがあること、そのような発想に対する驚きの感想が多かった。講演は胎児そのものの研究が進化し、想像をはるかに超えて胎児の能力があることなどを具体的な事例により示され、学生たちは授業を通して聞いていたものの、胎児への語りかけが実践されている例として実感をもって受けとめることができた。アメリカの〈出産カウンセリングセンター〉の胎児の人形を回し提示されたことなども効果的であった。また、高齢出産で赤ちゃんを亡くした方の話から、胎児が生まれる前から愛されて育つことの大切さ、生まれる前から命ある存在であることを深く感じたという記述が目立った。そこから、中絶が殺人ではないかということ、最近の産婦人科での事件などを取り上げ命の重みをもっと感じなければならぬと記述している。子どもの命と向き合う保育科学生、また母親になる可能性のある彼女らにとって、単に知識として受けとめるのではなく、心で深く受けとめたことは意義深いと考える。

鈴木中人さんの講演では、淡々と話される口調からかえって子どもに先立たれるという悲しみの深さを強く感じた学生が多かった。また、結果に述べたように、生き抜くこと、命を輝かせることの意味が学生に実感として伝わっていったと思われる。「子どもの死」を単に「悲しい話」として受けとめたのではなく、景子ちゃんによって命の意味、命の長さ(短さ)の意味、子どもの本来持っている強さ、子どもの心にあふれている愛、家族の愛、感謝する心、生きることとは、命が輝くこ

ととは、支えあうこととはなど短時間の講演から多くのことを考えるきっかけを得たといえる。また、結果では触れなかったが、ある学生の感想文の中で、鈴木さんが淡々と語るその様子を見ながら、最初不思議に思い、講演の終わりごろには鈴木さんが辛い思いを抑えて話されているのに自分がぼろぼろ泣いてしまったことをすまないと思い、さらに悲しいときは泣いていいのだという鈴木さんの言葉によって今度は救われた気持ちがしたことを描写していた。鈴木さんの話が、多くの学生に「生」と「死」について考えるきっかけとなっただけでなく、自分の内面をふりかえるきっかけとなったことがわかる。

また、鈴木さんの講演によって「死」を自分のものとして考え始めたという感想も多かった。第1回および2回のセッションで得た結果において、死の普遍性について述べている学生もいたが、あまり考えたことがなかったという学生や不老不死への願望を記述したり、死への恐怖やイメージとしての暗さを述べる学生も多かった。しかし、景子ちゃんの死により、「死」は「自分にも起こること」ととらえ、「考えなくてはいけない」という記述が多くなった。さらに命を輝かして生きることが自分にできるかと自問するようになった、死んだらそれで終わるのではなく誰かと共有していくことで永遠になるなどの感想から、「死」によって自分の「生」を考え、さらに自分なりの死生観を持ち始めたといえる。

しかし、保育者になる学生であるため、景子ちゃんが小さな命の炎を燃やして保育園に来た話から、将来自分の前に立つ子どもたちひとりひとりの命が、景子ちゃんの命と同様、かけがえのないものであることへの気づきを期待したがこれらに関する記述は見られなかった。1名「自分が景子ちゃんの保育園の先生の立場だったらいったい何ができるだろう」という記述があったが、それは「病気の景子ちゃん」に何をしてあげられるかという思いにとどまっておき、園児一人ひとりが実は景子ちゃんと同じように命の炎を燃やして自分の前に立っているという気づきではない。鈴木さんの講演をきっかけにさらに次の段階としてテーマを設定しグループ討議をしていくなどの方法が必要と感じた。

以上、5回のセッションを総合して得たものをここでまとめてみたい。

第一は、学生が「生」と「死」を意識的に捉えることの必要性に気づいたことである。前述したように「死」は多くの学生にとってそれについて深く考える機会がないものであった。その一方で、肉親を亡くした学生にとっては結果に述べたように悲しみやつらさにつながるため考えることを避けたいテーマであった。しかし、最終のまとめでは、これまで「死」についてきちんと考えることがなかったことや深く考えようとしなかったことに改めて気づくことができた。さらに「死」を学び考えることが、意味ある作業であることという認識へ変化していったと言える。学生Bの「こんなに死を深く考えたのは初めてだったので、“死”を考えて行く中で自分が成長したような気がします」(筆者傍線)という意見はそれを物語っているのではないだろうか。

第二に最初の段階では「死」を怖いイメージで捉えている者が多かったが、「死」への恐怖感が減った、逆に大切なことなので受けとめることが必要だと変化したことである。この当然のことから逃避したいという感情は先のデーケンの言葉にあるように万人に共通する人間の本能的な感情である。しかし「死」を「考えることによってプラスになるものがある」「死ぬことは辛く悲しいことに変りはないけれど、怖れることはないのかもしれない」と記述できるようになった学生もいた。「死」は自分が思っていたより身近なことであると思ったという意見にもあるように、学生同志が話し合ったことや実際の話聞くことにより、「死」は日常生活の中にあるということ、そして「死」が生延長線上にあるということへの認識が深まったといえるのではないだろうか。

第三に、「死」を考えることは「生」を考えることであるという気づきである。この気づきが最も多いのは今回のねらいが概ね達成したことにならないだろうか。2人の学生の感想の他に次のような重要な言葉があり、以下にそのまま引用する。

「生と死は切り離せない」「死について考えることは、今をもっと大切に生きようとか、周りの人を大切にしようという気持ち、何事にも精一杯がんばろうという気持ちを与えてくれる」「生きて

いることが当たりまえでない。今生きていることがすごいことだとは、こんな機会がなかったら考えなかった」「1日1日を大切に生きたい」「死そのものは未知だけれど、誰もがいつか死ぬかと思うと“死”までにどんな生き方をするかとても大切だと思います」「死について考えることは生きることについて考えるという発見、しっかり受けとめようと思った」「人は死に向かって生きているけど、毎日を充実させて生きていくことが大切」「死についてマイナスイメージばかりあったけれど、日々人に愛されることを実感出来るし、日々の生活を振り返る機会でもあると思います。人の命には限りがあります。どう過ごしていくか、どう生きていくか改めて見つめ直すことが出来たと思います。限りある人生の中で、自分らしく悔いの残ることがないような生き方をしたいと思いました」

これらの感想を見ると、わずか5回のプログラムであったが、改めて「生と死」を見つめることの重要性を感じる結果となった。レギーネ・シントラーは「私たちの死への問いは、私たちの生への問いを一緒に含んでいます。死を通して私たちの生は制限されており、その制限の故に生は大切なのです。」⁹⁾と述べている。私たちの生が制限されていることへの認識は、今をどのように生きるかを考える機会となった。上記の学生の言葉にあるように日々を振り返る機会となり、自分と家族や他者との関係を見つめることになった。また、悔いのない人生を生きたいという願いともなったのである。

プログラムの最後に行った、これまでの自分の「生と死」についての考えを振り返り記述するという作業は、青年期の一時期に立ち止まり、考えることの重要性を筆者らに教える結果となった。シントラーはエリザベス・キューブラー・ロス^{注2)}の言葉を引用し「死へと成熟する」¹⁰⁾という言葉を使用している。私たちは未だ日常「死」を語ることはタブーという雰囲気を持っている。また、ますます「死」が、バーチャルの世界での出来事かのごとく錯覚する今日である。しかし、私たちの生が制限されている以上、「死」を受け入れ「死へと成熟する」¹⁰⁾ことが今、求められていることではないだろうか。奇しくもある学生が、

これらのプログラムを通して、〈自分が成長したと感じた〉(前出)という感想を述べているが、このことこそ「死へと成熟する」一步ではないだろうか。

V おわりに

水谷¹¹⁾は、多発する少年犯罪に関連して、大人が「死」を教え説明することによって、子どもたちの持つバーチャルリアリティにおける死と、現実の死のギャップを埋める手伝いをする必要性を述べている。メディアやゲームが青少年の凶悪犯罪の主要な要因になっているかどうかはさらに多くの調査結果を待たなければいけないが、命の大切さを教えることが急務であることに疑問の余地はない。文部科学省は佐世保の小学校6年生による同級生殺害事件をきっかけに、来年度から倫理観の育成等をテーマに調査研究事業開始を決定し、小中学校における「命を大切に教育」の充実を図るための予算を盛り込んだ¹²⁾。短大生においても今回の研究でわかったように、「死」について強い恐怖心を持つものや死を「悪」としかとらえられない学生もいることから、同様に授業展開されることが望まれる。ただ、本学のように保育科であるという対象の特殊性に応じて、理解しやすい言葉で無理のないプログラム作りをすることが必要である。今回は「死」の意義や、死のプロセス、脳死などの講義を行わなかった。しかし、「死とは何か」を生物学的、哲学的、宗教学的な立場から述べた文献を精選し読ませる、あるいは臓器移植や延命措置について調べさせたり討論させたりすることも可能であろう。さらに第5回の記述において学生Aが、「『死についての絵本』を全冊読破しましたが、その後湧き上がってくる気持ちは決してむなしさとか生命に終わりがくることの悲しさだけでなく、今生きていることの大切さ、周りの人が生きていてくれていることに対する感謝でした」と述べたように、死をテーマにした絵本を利用して感想を書かせたり、意見を交換したりすることは日ごろから絵本に親しんでいる本学学生には有効であると考えられる。今後はさらにこれらのプログラムを加味した形で授業展開し、有効性の分析を継続していく必要があるだろう。

謝辞

今回のプログラムにおいて快く講師を引き受けてくださいました畑野寿子さん、鈴木中人さん、協力してくださった総合演習の学生さんに心よりお礼を申し上げます。

【注】

- 1) 思春期と訳す場合が多いが、文献4、23ページに、adolescentsを、13~14歳、16~17歳、18~19歳の3つのグループに分け、最後のグループは「大学に行っているかフルタイムの仕事についている年齢」と述べていることから、今回は大学生を包含する言葉として用いた。
- 2) スイス生まれ。2004年8月24日78歳で死去。米国で活躍した精神科医。1966年、500年余りのあらゆる階層・環境・性格・状態の臨死者ヘインタビュー。邦訳著書に「死ぬ瞬間」「続死ぬ瞬間」「死ぬ瞬間の子供たち」読売新聞社、などがある。

【引用文献】

- 1) 甲斐裕美「子どもへの Death Education」『小児看護』26巻13号、2003年、pp. 1741-1744
- 2) 宇都宮直子『「いのちの教育」に取り組む教師たち』中央公論、118巻9号、2003年、pp. 190-197
- 3) アルフォンス・デーケン『生と死の教育』岩波出版、2001年
- 4) Earl A. Grollman, *Bereaved Children and Teens-A Support Guide for Parents and Professionals*, Boston: Beacon Press, 1995, p. 25
- 5) James Goertzen, "Death of a Child" *Canadian Family Physician* vol. 39 (1993), p. 2578
- 6) R. C. ミラー、鍋倉勲訳『死の教育』ヨルダン社、1997年
- 7) 野村 滋『昔話と文学』白水社、1993年
- 8) 3と同じ
- 9) レギーネ・シントラー『希望への教育』日本基督教団出版局、1992年
- 10) 9と同じ

- 11) 水谷めぐみ「子供に『死』を教えるということ」『看護』2001；4、pp. 110-113、抜粋箇所 p. 110
- 12) 2004年8月22日読売新聞14版30ページ
- 13) アルフォンス・デーケン、メジカルフレンド社編集部編『叢書 死への準備教育 第3巻 死を考える』メジカルフレンド社、1986、pp. 10-11

Exploring Life and Death

— Trial Educational Sessions for the Early Childhood Education Students —

Onoe, Akiko*

Nakane, Junko*

Today people seem to take life for granted. Because "life" seems to be fading away from people's consciousness, the authors of this paper considered that it might be necessary to provide educational sessions on life and death to Early Childhood Education (ECE) students, who work with young lives everyday. To determine if such educational sessions are beneficial to the students, a series of five sessions was provided to them. Those sessions provided opportunities for the students to examine their feelings about life and death through lectures and group work. At the end of the five sessions many students reported that, although "death" was a subject which they preferred to avoid, they now realized that to think about death made them think about how they wanted to live. Thus, the positive feedback from the students may indicate that "life and death" are important subjects to be included in the training of early childhood educators. There seem to be many ways to deliver such educational sessions. Further studies are needed to determine effective ways to educate ECE students on the subject.

キーワード：死 (death), 生 (life), 教育 (education), 保育者養成 (training of early childhood educators)